

認知症対応型通所介護施設「デイサービスセンター四縁」の利用形態と使われ方

—木造民家を活用した通所介護施設と介護予防・生活支援サービスの一体的整備運営 その4—

準会員 ○瀬戸口 佳奈美*
正会員 三島 幸子**
正会員 中園 真人***

医療法人 通所介護施設 事業概要
生活支援 使われ方

1. はじめに

その1、2では医療法人社団田町診療所の事業内容を整理し、運営する3通所介護施設の概要について、その3では通所介護施設暖家の使われ方の特徴について論じた。そこで、本論では認知症で要介護の高齢者を受け入れる、武家屋敷を活用した認知症対応型通所介護施設「デイサービスセンター四縁」(以下、四縁)の利用者の基本属性を整理した上で、施設の使われ方調査結果をもとに、活動プログラムと場面転換の分析を行い、四縁の使われ方の特徴を明らかにすることを目的としている。

調査は第1に、利用者の基本属性及び利用形態を明らかにするため、施設に対し利用者に関するアンケート調査を行った。調査項目は、利用者の性別・年齢・介護度・車椅子の有無・利用頻度・入浴の有無、居住地域である。第2に、3施設での利用者・職員の行動観察調査を行った。行動観察調査は終日5分間隔で行為の場と内容の記録及び写真撮影を行った。調査期間は2018年9月18, 21, 26日である。

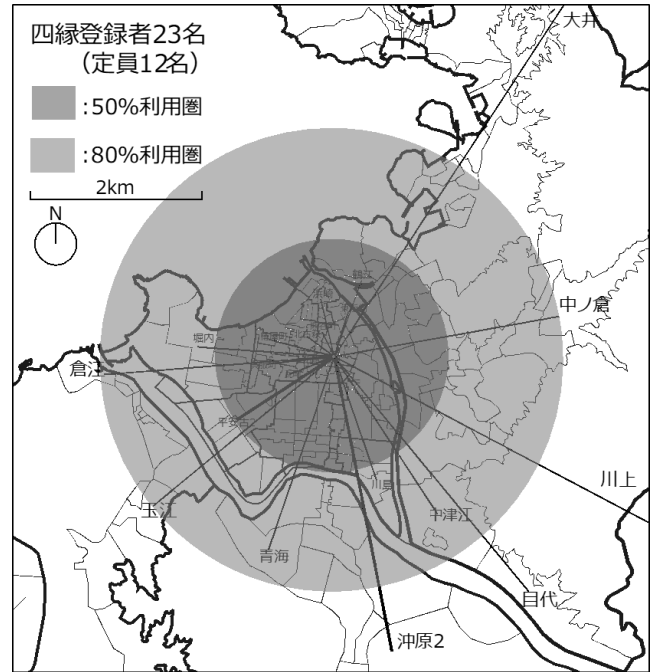


図1 施設利用圏

2. 施設の利用形態

2.1 施設利用圏

施設と利用者居住地の直線距離を用いて算出した施設利用圏を図1に示す。利用登録者数は23名で、50%利用圏は約1.6km、80%利用圏でも約2.7kmと狭い^{注1)}。これは施設が萩市の中心市街地に立地しており、周辺からの利用者が多いためである。一方、施設から8kmほどある川上や、大井などの遠方からの利用もみられる。

2.2 利用者の基本属性と利用形態

利用登録者の基本属性と利用形態を図2に示す。基本属性について、性別は女性が6割以上を占め多い。年齢は利用者全員70歳以上で、85~89歳が約4割と最も多く、次いで90~94歳が2割を占め、年齢層が高いのが特徴である。介護度は要介護1,2の利用者が8割を占め、介護度の低い利用者が多い。車椅子の利用者も1割に未満と少ない。

利用形態について、利用回数は週2回が半数以上と最も多い。週3回以上の利用者も4割程度と多く、利用回数が多い利用者が多い。入浴サービスは大半の利用者が

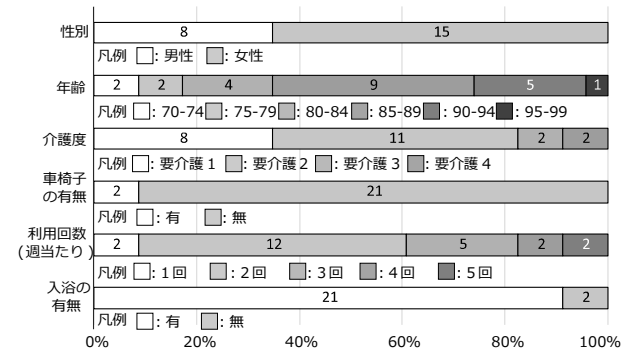


図2 利用者の基本属性と利用形態

表1 職員の役割分担と利用者の基本属性

職員	記号(性別)	9/18(火)			9/21(金)			9/26(水)			合計(人)
		送迎	入浴介助	機能訓練・レク	送迎	入浴介助	機能訓練・レク	送迎	入浴介助	機能訓練・レク	
利用者	A(男)	○●	休	○●	○●	休	○●	○●	休	○●	12
	B(女)	○□■	○□	△□	○□	休	○□	○□	休	○□	10
	C(女)	●△	△□	休	●△	休	●△	●△	休	●△	2
	D(女)	○□■	○●■	●	○□■	○●■	●	○□■	○●■	●	2
	E(女)	○●△	△	○	○●△	△	○	○●△	△	○	0
	F(女)	休	○●□	休	休	○●□	休	休	○●□	休	1
	G(女)	休	休	○△□	休	休	○△□	休	休	○△□	1
	H(女)	休	休	■	休	休	■	休	休	■	1
合計(人)		8	10	9	8	10	9	8	10	9	27

凡例：職員に関して ○：送迎 ●：入浴介助 □：機能訓練・レク ■：昼食(調理) △：バイタルチェック
注1) 職員Gは美手職員、職員Hは暖家の調理パート 注2) 21日は暖家の男性職員が男性利用者の入浴介助

The use pattern and the usage of “Day Care Facility Shien”
Management of a day care facility, preventive care and living support service converted a wooden house (Part 4)

SETOGUCHI Kanami, MISHIMA Sachiko, NAKAZONO Mahito



図3 1日の生活プログラム

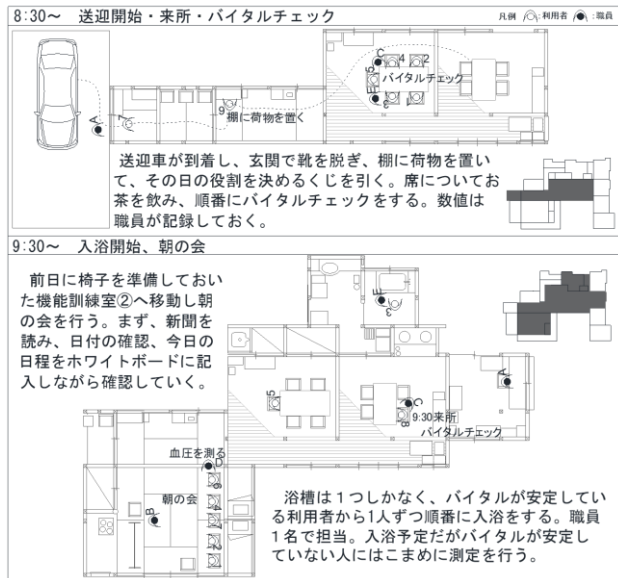


図4 送迎(迎え)・バイタルチェック、入浴・朝の会

利用している。

2.3 調査期間中の職員の役割分担と利用者属性

調査期間中の職員の役割分担と利用者の基本属性を表1に示す。職員は1日5-6名で対応する。職員は1日の主担当が決まっているが、必要に応じて他の業務も担当する。送迎は送迎車2-3台で3-4名の職員が担当し、2回に分けて行う場合もある。入浴サービスは基本的に男女各1人で行い、着替え補助と声掛けを担当する職員も1名配置している。バイタルチェックや機能訓練も主に2名が担当するが、手の空いている職員も補助にあたる。昼食は食器や盛り付け準備に1名、昼食中の見守りに2名が担当する。

1日の平均利用者数は10名前後であり、半数以上が要介護1・2で、要介護3以上は少数で、来所しない日もある。

3. 一日の生活プログラム

調査日の1日の生活プログラムを図3に示す。送迎(迎え)は8:20から始まり、20分ほどで1台目の送迎車が到着し、来所した利用者からバイタルチェックが行われる。入浴サービスは9:00頃から順次行われるが、日によって開始時間が異なる。午後14:00から入浴サービスが行われ、数名が入浴する。9:30頃から朝の会をし、体操に移る。準備体操としてラジオ体操から始まり、座位体操



図5 体操、移動・水分補給

が行われる。11:00頃に手作業に移る。11:40頃から片付けをして、昼食準備を始める。利用者はその間に口腔体操を行う。12:00頃に準備ができ次第昼食をとる。12:50を目安に片付けて口腔ケアをし、自由時間に移行する。午睡を取る利用者が多いが、手作業や趣味に時間を使う利用者もみられた。14時前はお茶の時間が取られている。14:00からレクリエーションが行われ、その後記憶想起として今日の感想を記入する時間が取られている。記入後、口腔体操をし、おやつを食べ、掃除を行う。帰宅前に軽く体操をして、1日を振り返り、帰宅準備をすると16:00に一斉に送迎となる。また、月に1度手作業としてクッキングを行うが、その日は体操と時間が入替わる。

このように一部開始終了時間にばらつきはあるが、1日の生活プログラムは同様である。そのため、本論では9/18を典型日として抽出し、1日の流れをみていく。

4. 生活プログラムと施設の使われ方

4.1 送迎(迎え)・バイタルチェック、入浴、朝の会

送迎(迎え)・バイタルチェック、入浴・朝の会の場面を図4に示す。送迎車が到着すると、待機職員が出迎え靴の履き替えを補助し、利用者が荷物を置く。その後、利用者は今日の担当が書かれたくじを引き、職員がそれをもとに席に誘導する。日付や台拭き・お茶係などがあるが利用者の状況次第では気分を損ねるので実施しない日もある。これは、利用者に関与を持たせて、少しでもできることをしてもらうことに意義がある。着席した利用者からバイタルチェックを行う。また、朝食サービスも行っており、早めに来所して朝食をとる利用者もみられた。認知症の高齢者は朝の服薬を忘れることが多いためサービスを始めたが利用者は少ない。独居利用者の利用が多い。

入浴サービスは9:30からバイタルチェックを受けた利用者から始める。利用者1人ずつ入浴し、入浴時間は一人当たり20分前後である。同時刻から朝の会のため、機能訓練室②に移動して、1日の流れを職員と確認する。

4.2 体操、移動・水分補給

体操、移動・水分補給の場面を図5に示す。朝の会が

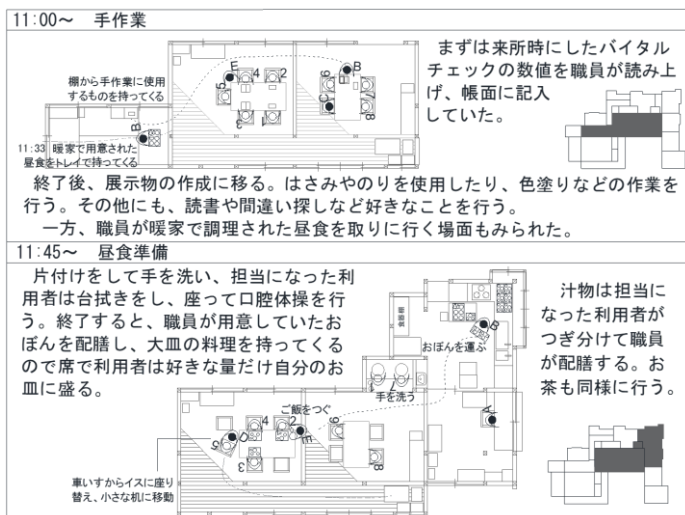


図6 手作業、昼食準備



図7 昼食、昼食片付け

終わるとすぐに体操に移る。最初に準備体操としてラジオ体操を行う。基本的には座ったまま行うが、立って行う利用者もみられた。次に座位体操で、主に四肢を動かす。10:40には終了し、手作業のため移動するが、トイレ休憩と水分補給を兼ねて時間に余裕を持たせている。職員は1名が片付けに当たり、次の活動の準備を行う。

4.3 手作業、昼食準備

手作業、昼食準備の場面を図6に示す。最初に、職員が記録しておいたバイタルチェックの数値を利用者に記入してもらう。これは、自分では書く作業をする機会を設けるためである。その後、各自作業を始める。この日は秋の飾り作りでトンボの形をハサミで切るといった細かい作業が多くみられ、利用者は集中して行っていた。その間に職員は先に昼食の準備に移る。

11:45頃に使用した片付け、昼食準備を行う。台拭き係は職員から台ふきを受け取り、テーブルをふく。また、口腔体操が行われ、その後職員が中心に食事の配膳を行い、お茶係はお茶入れ、配膳係は汁物を注ぎ分ける等を行う。基本的に利用者は座ったまま準備が行われるため、負担は少ない。

4.4 昼食、昼食片付け

昼食、昼食片付けの場面を図7に示す。昼食は12:10

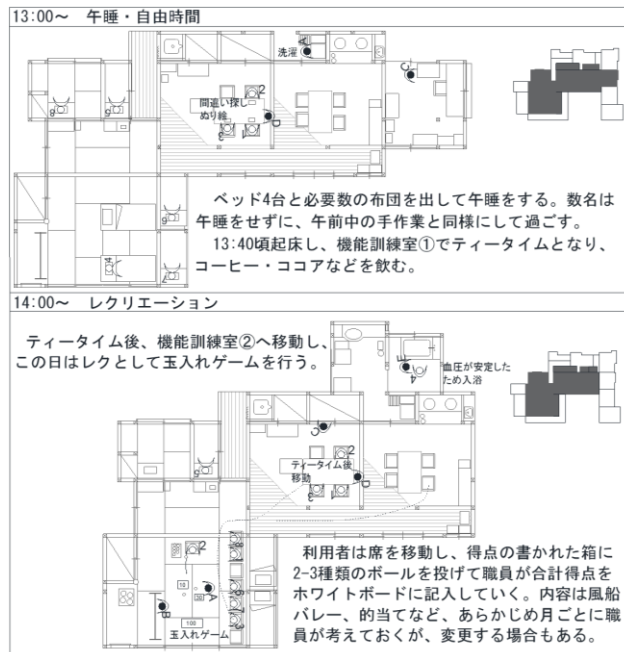


図8 午睡・自由時間、レク



図9 移動・おやつ、掃除・体操・送迎(送り)

過ぎに食べ始める。食事補助を受ける利用者は調査期間中1名のみであった。大半の利用者が食べ終わると、職員が見回り、残量を記録し片付けに移る。

昼食片付けは利用者が自分でキッチンにおぼんを運ぶ。一度に全員キッチンに移動すると混雑するため、数グループに分けて行う。その後、洗面台に歯ブラシが置いてあり、利用者は自分で口腔ケアを始める。洗面台に並んで待機するとキッチンとの通路を塞ぐことになるため、席について空き次第職員が声を掛ける。



図 10 特別日の手作業（クッキング）

4.5 午睡・自由時間、レク

午睡・自由時間、レクの場面を図 8 に示す。午睡は基本的に大半の利用者が取るが、眠れない利用者は機能訓練室①に残って好きなことを行う。13:40 頃には起床し、片付けてお茶の時間となり、コーヒーやココア、お茶など好きな物を選んで自分で粉末を入れ、職員がお湯を注ぐ。14:00 を目安にレクに移る。まず、職員がその日の内容の説明をし、お手本を見せたら、利用者が一人ずつ順番で行い、その他の利用者は応援しながら見守る。この日は玉入れが行われていた。内容は様々で、楽しく体を動かせるように工夫していた。

4.6 移動・おやつ、掃除・体操・送迎(送り)

移動・おやつ、掃除・体操・送迎(送り)の場面を図 9 に示す。レク終了後移動し、記憶想起のため、今日の感想を一言でもいいので記入する。それが終わると簡単な口腔体操をし、おやつ時間となる。昼食同様、担当の係が台拭き・お茶を注ぎ、職員が配膳して揃ったテーブルから食べ始める。

15:20 には掃除の時間となり、洗濯物干しや、おやつで使用した食器洗いが行われていた。掃除機をかける時もある。10-20 分ほどで終わり、機能訓練室②に移動し、軽い座位体操で足を動かす。最後にホワイトボードに書いた 1 日の流れを穴埋め形式で振り返りをし、その間職員が送迎車を準備する。送迎は全員同時に行われるため、待機時間はほとんどない。

4.7 特別日のクッキング

特別日として、クッキングの場面を図 10 に示す。9/26 はその日の四縁利用者の昼食とおやつを自分たちで作るクッキングが行われた。通常は体操が行われる時間に手作業としてクッキングを行い、その後が体操と順番が逆になるのが特徴であるが、それ以外の日程はほとんど変わらない。

最初に、調理ができるよう身なりを整えて、立ち作業ができる利用者はキッチンに移動する。この日は調理補助として暖家の調理パートが手伝い、下準備を行っていた。職員はキッチンと機能訓練室①に 1 名ずつ以上配置

させて、刃物を使用するので職員の目が行き届くように注意している。利用者に応じて作業の内容を変えており、機能訓練室①では道具を使用せずに手でちぎったり、形を作るなど簡単な作業が行われ、キッチンではお米を研ぎ、水を計って入れたり、炒め物なども行う。クッキングのメニューは、介護度の違う方でも全員が作業できるように考えている。

5. まとめ

- 1) 施設利用圏は 80%が 2.7km と狭く、萩市中心市街地からの利用者が多いが、遠方からの利用者も数名いる。利用者属性は 6 割が女性で、85 歳以上の利用者が半数以上を占め、年齢層が高い。介護度は要介護 1、2 と介護度の低い利用者が多い。利用回数は週 2 回の利用者が多い。
- 2) 利用者が 1 日の大半を過ごす機能訓練室①の広さは十分にあるが、キッチンへの動線は複数人では通りにくいいため、食事片付けでは混雑することから、数グループに分ける等の工夫がみられた。
- 3) 機能訓練室①と機能訓練室②がプログラムに応じて使い分けられているため、準備始末行為が円滑に行われていた。また、利用者の移動が多く、短距離ではあるがリハビリ効果も期待される。一方、各居室の収納が少なく、縁側が物置となっていた。
- 4) 体操や手作業に加えて、バイタルチェック結果の記録やレク後の感想の記入、送迎前の 1 日の振り返り等記憶想起につながる活動を積極的に取り入れていることが分かる。また、来所時にくじ引きで係を決めるなど、自分の施設での役割を持たせて、利用者の活動を促すシステムを取り入れている点も評価できる。
- 5) 民家活用の施設で洗濯干しや食器洗い、クッキングなど、日常生活に必要な動作を行うことで、自宅にいるような感覚になり、機能訓練にもなるため、認知症の方でも安心して過ごすことができている。

注

- 1) 既往研究¹⁾によれば、旧萩市内に位置する通所介護施設の利用圏の平均は 50%利用圏が 2.4km、80%利用圏が 4.1km である。

参考文献

- 1) 三島幸子他 4 名：社会福祉事業団による高齢者通所介護施設の整備プロセスと利用特性，日本建築学会計画系論文集，第 82 巻，第 732 号，pp. 353-361，2017. 2
- 2) 中園真人・三島幸子・加登田恵子：街なかの伝統民家を再利用した地域福祉施設「さんコープ河村邸」の使われ方，日本建築学会計画系論文集，第 652 号，pp. 1581-1589，2010. 6

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部長

** 島根大学学術研究院環境システム科学系 助教・博士(工学)

*** 山口大学大学院創成科学研究科 教授・工博

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

** Assistant Prof., Institute of Science of Environmental Systems, Shimane Univ., Dr. Eng.

*** Professor, Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr.Eng.